

ニュース番組で用いられる言語の変化について

轟 里 香 *

A Study of Changes in the Language Used in Visual News Programs

Rika Todoroki *

Received November 4, 2008

Abstract

The aim of this paper is to clarify some profound changes in the language used in the visual media, especially in TV news programs in Japan, and show what factors cause these changes. A lot of TV news programs have been changed to be similar to entertainment programs in recent years. This affects the language used in those programs. In this point, visual images play a very important role. I compare TV and radio news programs to show visual images are essential for the language used in the TV news programs which are similar to entertainment ones. Additionally, by comparing different news programs produced by the same television station, I show that the target audience of a TV news program can affect the language used in the program.

1. 導入

近年、日本においてメディアで使われる言語は大きく変化している。本論文は、映像メディアとしてのテレビ、特にいわゆるニュース番組で近年用いられている言語の特徴、およびそれに関し映像が果たす役割について考察する。

轟 (2007) は、近年ニュース番組において顕著に見られる現象として①体言止めあるいは助詞の省略¹⁾ (以降、体言止め・助詞の省略と表記する)、②動詞的要素の省略、③要点の後置・省略を取り上げ、例を挙げて指摘した。これらに加え、本論文では、近年のニュース番組で用いられる言語において特徴的な点をさらに挙げる。また、ラジオ番組との比較を通して、テレビのニュース番組で近年用いられている言語に関し映像が果たす役割について考察する。さらに、同じ放送局の別々のニュース番組を比較し、同じテレビでも使われている言語の特徴が異なることを指摘して、その背後にある要因を考える。

本論文の構成としては、まず2節で、轟 (2007) の議論を踏まえ、上に述べた①~③の現象

* 教育能力開発センター
Center of Development for Education

を説明する。これに加え、近年ニュース番組で顕著に見られるその他の現象を3節で指摘する。4節では、テレビとラジオのニュース番組で用いられている言語の比較を行い、テレビのニュース番組で用いられている言語に映像が大きな役割を果たしていることを見る。5節では、同じテレビ局（NHK）で製作された二つのニュース番組の比較を通し、番組によって言語の変化の程度にかなり違いがあることを明らかにする。6節では、本論文の議論のまとめを行う。

2. ニュース番組における言語の特徴

この節では、近年のニュース番組において顕著に見られる現象を、轟（2007）で指摘した例やその他の例を挙げて考察する。

2.1 体言止め・助詞の省略

近年映像メディアにおいて顕著に見られる現象として、以下の（1）のような、体言止め・助詞の省略が挙げられる。

- (1) a. お盆を過ぎても続く厳しい残暑。
 b. 東京電力では午前中から電力の需要がぐんぐん増加。
 c. 地震発生から一週間。
 d. 光化学スモッグの主な原因となる化学物質オキシダント、インターネットで濃度の予測データの公開が始まりました。

（「おはよう日本」NHK，2007年8月23日放送）²⁾

- (2) a. 真っ黒い煙と吹き上がる赤い炎。
 b. 火災が起きたのは、プラスチックなどの原料となるエチレンを作るプラント。

（「ニュースウォッチ9」NHK，2007年12月21日放送）

報道関係では従来新聞記事の見出しなどで用いられてきた体言止め・助詞の省略が、映像メディアで頻出するようになってきている。2005年に放送されたニュース番組（「おはよう日本」NHK，2005年2月18日放送）では、体言止め・助詞の省略は皆無ではないものの、非常に少ない。これに対し、（1）で例を挙げた2007年8月23日放送の同番組では、体言止め・助詞の省略が多用されている。（2）で例を挙げた「ニュースウォッチ9」は、体言止め・助詞の省略が特に多く出現する番組であるが、2007年12月21日放送のものでは、ほぼ60分の番組の中で体言止め・助詞の省略が実に83回も確認された。平均すると約43秒に1回生じている計算になる。このようなことから、NHKの報道番組に限ると、体言止め・助詞の省略の劇的な増加は、かなり短期間のうちに生じたことが分かる³⁾。

この体言止め・助詞の省略という手法自体は最近できたものではなく、古くから存在している。映像メディアの報道においても、スポーツニュースではかなり前からこの傾向があった。1974年のニュース番組においても、スポーツニュースのコーナーでは体言止めが確認できる。

- (3) a. 選抜高校野球は早くも5日目。
 b. 叫んだり、踊ったり、そして涙するアルプススタンド。
 (「ニュースセンター9時」NHK, 1974年4月1日放送)

近年の番組でも、体言止め・助詞の省略が顕著に見られるのは、スポーツニュースである。(2)で挙げた「ニュースウォッチ9」も、スポーツニュースコーナー(約10分間)で体言止め・助詞の省略が生じた回数は21回で、約29秒に1回生じていることになり、番組全体での平均出現頻度よりも高くなっている。

このように、体言止め・助詞の省略が、映像メディアで非常に多く見られるようになってきている。轟(2007)は、このような言語的变化が、事実をできるだけ客観的に伝えるというより、脚色して伝えるという、報道の姿勢における変化の現れだと指摘した。ニュース番組が娯楽的ないわゆる「ワイドショー」の要素を盛り込むようになってきているのである(加来 2007)⁴⁾。スポーツニュースではかなり前から体言止め・助詞の省略が現れていたことから、ニュース番組を娯楽的に脚色する傾向はスポーツ関係のニュースから始まったことになる。以前はスポーツ関係に限られていたこの傾向が、ニュース番組に娯楽要素が盛り込まれるようになるとともに、近年あらゆるジャンルのニュースに広がったと考えられる。

元々、体言止め・助詞の省略という手法は特殊な文体的効果を目的として用いられるものである。しかし、(2)で例を挙げた「ニュースウォッチ9」のように、体言止め・助詞の省略が約60分の番組の中で83回も生じているとなると、このような番組においてはもはや特殊な効果を狙った表現というよりは、日常的な表現になっていると言える。

このように、体言止め・助詞の省略は、現在映像メディアにおいて非常に顕著な現象である。

2.2 動詞的要素の省略

映像メディアで使用されている言語の変化は、2.1で述べた体言止め・助詞の省略の増加にとどまらず、言語的にはもっと重大と言えるような変化が生じている。

影山(1999)によれば、動詞的概念を形態的に明示する必要があるかどうかに関し、英語と日本語には相違がある。この点を示すものとして、影山は名詞から動詞への転換を例として挙げる。転換とは、元の形態はそのまま品詞だけを変える操作である。英語では、形態を変えずに名詞を動詞としても用いるということが頻繁に生じる。影山が英語における名詞から動詞への転換の例として扱っている単語の一つに、以下に挙げる *butter* がある。

- (4) *butter* 名詞：バター
 動詞：バターをぬる
 (5) *She buttered four thick slices of bread.* (*Oxford Advanced Learner's Dictionary* 2000)

これに対し、日本語では、形態を変えずに名詞を動詞としても用いるということはむずかしい。名詞「バター」に屈折語尾をつけて動詞として使おうとすると、不適切な文になる。

- (6) a. *彼女は4枚のパンにバターった。

b. 彼女は4枚のパンにバターをぬった。

(轟 2007: 128)

(6) が示すように、日本語ではぬるという動詞的概念を「ぬる」という動詞として形態的に明示しなければならない。このようなことから、影山は次のように結論付けている。

(7) (日本語は) 動詞概念をそのまま形態的に明示する必要がある。一方、英語は動詞的な概念を明確な形で表現しなくても済ませられる言語である。(影山 1999: 93)

ところが、近年、映像メディアにおいて、これに反するように見える例が出現している。

- (8) 逆転有罪判決です。(cf. 逆転有罪判決が出ました)
(「ニュース7」NHK, 2006年3月6日放送)
- (9) 日本航空の機内食でアメリカ産牛肉です。
(cf. 日本航空の機内食でアメリカ産牛肉が出されました)
(「ニュース7」NHK, 2006年3月10日放送)
- (10) 選挙の取り組みが本格化です。(cf. 選挙の取り組みが本格化しています)
(「ニュース7」NHK, 2007年7月5日放送)
- (11) 日本政府はきょう、このザトウクジラの調査捕鯨を急きょ中止する方針を明らかに。
(cf. 中止する方針を明らかにしました)
(「ニュースウォッチ9」NHK, 2007年12月21日放送)

(8) から (11) の例では、それぞれ括弧中の下線部に当たる概念が形態的に明示されていない。このように、従来日本語では明示される必要があると言われてきた動詞概念が、形態的に示されずに省略されている表現が、映像メディアにおいて急激に増加している。

2.3 要点の後置・省略

ここでは、映像メディアにおける言語変化の第三点として、文の重要な要素を省略して後述するという点について取り上げる。

近年、映像メディアでは、最も重要な要素を後ろに回す表現が非常に目立つようになった。次の(12a, b)では、より重要な要素である文が第二文として置かれている。

- (12) a. 国内最大の百貨店グループが誕生します。大手百貨店の三越と伊勢丹は、来年4月に経営統合することを正式に発表しました。
- b. 夢の電池登場となるのでしょうか。バイオ電池なるものが開発されました。
(「イブニングニュース」TBS, 2007年8月23日放送)

(13) は4つの文からなっているが、最も重要な要素である文が後置されている。

- (13) 県特産物を守ろうとみんなが力を合わせます。農協や農家が結成したパトロール隊。守ろうとしているのは秋の味覚20世紀梨です。鳥取県佐治町では、毎年収穫直前の梨が盗まれていることから、今年パトロール隊を結成しました。

(「ニュース7」NHK, 2007年8月23日放送)

(13) の例では、最も重要な要素である「鳥取県佐治町では、毎年収穫直前の梨が盗まれていることから、今年パトロール隊を結成しました。」が最後に置かれている。

このような文章構成が、視聴者がニュースの内容を理解する際にどのような影響を与えるかを、(14) を例に見てみよう。(映像で字幕が出た時点を文中に記しておく。)⁵⁾

- (14) (アナウンサー)「700万円払った部下もいました。神奈川県警察本部の警視が関与した疑いが

(字幕「`靈感商法、警視が部下の警察官を…」が画面に出る)

出ている靈感商法事件で、この警視は、部下の警察官を靈感商法が行われていたサロンに勧誘したり、投資話を持ちかけて金を集めていたことがわかりました。」

(「ニュースウォッチ9」NHK, 2007年12月21日放送)

(14) の第一文「700万円払った部下もいました。」は、ニュースの内容をつかむには情報量が著しく不足している。字幕も省略を含んでいるがその字幕さえも途中まで出ないので、最初のほうでは視聴者はあたかも謎のような言葉を投げかけられて五里霧中の状態に置かれたようなものである。アナウンサーの言葉が進むにしたがって次第に状況が明らかになってくる。

このような構成は、小説などの文学作品では効果を狙って頻繁に用いられるものである。テレビ番組でも、ドラマでは珍しいものではないだろう。しかし、報道においては従来用いられていた構成とは明らかに異なっている。これまで、新聞記事など報道に関わる言語においては、要点を最初にもってこなければならぬといわれてきた。例えば、日本語の新聞記事を英語に翻訳する際の注意点について論じている根岸(1999)は、最も重要な要素をアタマに置かなければならぬと述べている。一言で言えば、「重点先行」ということになる。近年の映像メディアでは、しばしば「重点先行」ならぬ「重点後行」になっていることが多い。

時には、要点のみならず、統語的に必須の要素さえ、後ろに回されている場合もある。そのような要素が後ろにさえ現れず、完全に省略されてしまう場合もある。(15) の例を見てみよう。

- (15) a. 民主党の対案の提案に対し、与党は。
 b. 一方他の野党からは。
 c. 福田総理大臣は。

(「ニュースウォッチ9」NHK, 2007年12月21日放送)

(15) のような例は最近非常によく見られる。統語的には「福田総理大臣は次のように述べま

した。」等と言うべきところを、述部が完全に省略されるのである。

(15 a-c) の言語表現が現れた場面を比較すると、非常に類似したパターンがあることに気づく。(15 c) を例に、この言語表現が現れた場面を2つに区切って映像、画面上の字幕、音声の現れ方を表1に示す。表の右端の列は、録画したDVDの時間によるその場面のおおよその開始時刻を表す。

表1

映 像	画面上の字幕	音 声	発話者	開始時刻
福田総理大臣 と記者たち	左上「民主党が対案提出 新テロ対策特措法は」	「福田総理大臣は。」	ナレーター	21:07:32
福田総理大臣	左上「民主党が対案提出 新テロ対策特措法は」 右上「福田首相」 下部に音声と同じ内容の字幕	「ちょっと拝見しました が、わかりません、 よくわかりません。(以下、 筆者による略)」	福田総理大臣	21:07:34

ここで注目したいのは、次のようなパターンである。①ナレーターの「○○は」（「福田総理大臣は」）というナレーションとともにその人物（福田総理大臣）が映像で登場する。②画面の右上にその人物が誰かを示す字幕（「福田首相」）が出る。同時にその人物（福田総理大臣）の発話が始まる。これとほとんど同じパターンで（15 a, b）も出現している。つまり、(15) のような表現は、このニュース番組の中ですでにパターン化されていることがわかる。

このように、近年の映像メディアでは、統語的に必須の要素を省略するなどにより統語的条件がしばしば破られている。文学的な作品では、統語的な規則をあえて破ることによって生じる違和感を効果として利用する場合があるが、映像メディアにおいて統語的な規則をしばしば破っているのは、このような効果を目的としている可能性もある。そうだとすれば、統語的な規則を破って省略を行うことも、2.1節で述べた、ニュースを娯乐的に脚色するという傾向と関連があることになる。

3. その他の特徴

前節では、轟（2007）で指摘した、近年のニュース番組において顕著に見られる現象である①体言止め・助詞の省略、②動詞的要素の省略、③要点の後置・省略を概観した。本節では、これら以外の現象として、まず次のような表現を取り上げる。

- (16) a. 株価の下落に歯止めがかからないのはなぜなのでしょう。
b. なぜ15人もの人が犠牲になったのか。
c. あすはどうでしょうか。

（「ニュース7」NHK、2008年10月6日放送）

(16 a-c) の各文は、疑問の形をとっている。このような疑問形の文が、近年ニュース番組で

非常に目立つようになっていく。

加えてこの節で指摘したいのは、ニュースを読む人がだれか、ということである。(以下では、アナウンサー、記者など、ニュース番組でニュースを伝えるため音声言語を発している人を総称して「報告者」と呼ぶことにする。)報告者の中で、アナウンサー、気象予報士などは顔が出ると共に名前が字幕で出る。これに対し、報告者の顔も名前も出ない場合がある。例えば、2008年10月6日放送のNHK「ニュース7」では、途中3回ほど女性の報告者がアナウンサーに代わってニュースを読んだが、顔も名前も出ない。また、通り魔事件のニュースの中で、容疑者が犯行前に書き込んだとされる携帯サイトの書き込みを、男性の報告者が読み上げたが、その報告者の顔も名前も出なかった。その前後の発話の流れは、次のようなものである。

(17) (アナウンサー)「今年6月8日、東京の秋葉原で起きた通り魔事件。7人が死亡し、10人が重軽傷を負いました。」

(匿名の報告者)「車でつっこんで、車が使えなくなったらナイフを使います。さようなら。」

(アナウンサー)「事件前、携帯電話のサイトにこう書き込んでいた加藤容疑者。」

(17)のように、最近のニュース番組では、報告者が匿名である場合がしばしば見られる。この「報告者の匿名性」と呼べるような現象が、近年のニュース番組の特徴となっている。

上で述べた、「通り魔事件の容疑者の携帯サイトの書き込み」を読み上げた男性の報告者は、あたかも演技をしているかのように読んでいる印象を与える。これも、ニュースを娯楽的に脚色するという傾向と関連がある可能性がある。しかし、娯楽的な番組であるドラマでは通常、俳優(あるいは声優)の名前は明示される。したがって、ニュース番組中で容疑者役を演じているように原稿を読む報告者が匿名であることには、ニュースを娯楽的に脚色するという傾向に加え何らかの要因が働いていると思われる。

4. テレビとラジオのニュース番組の比較

上で述べたような、テレビのニュース番組における現象は、ラジオではあまり見られない。この点を明らかにするため、実際にNHKのテレビとラジオのニュース番組を比較した。以下で比較するのは、テレビは「ニュース7」(午後7時から7時30分放送)、ラジオは「NHKきょうのニュース」(午後7時から7時45分放送)で、共に2008年10月6日に放送されたものである⁶⁾。まず、2節で述べた体言止め・助詞の省略、動詞的要素の省略、要点の後置・省略が、ニュース番組の報告者が使った言語に現われた回数を表2に示す。

表2

	「ニュース7」 (テレビ、放送時間30分間)	「NHKきょうのニュース」 (ラジオ、放送時間45分間)
体言止め・助詞の省略	18	5
動詞的要素の省略	3	0
要点の後置・省略	2	0

表2が示すように、テレビと比較して、ラジオでは、体言止め・助詞の省略、動詞的要素の省略、要点の後置・省略が非常に少なくなっている⁷⁾。興味深いのは、スポーツコーナーの比較である。2.1で指摘したように、スポーツニュースではかなり前から体言止め・助詞の省略を用いる傾向があり、1974年のニュース番組においても、スポーツニュースのコーナーでは体言止めが確認された。表2で比較した2008年10月6日放送の「ニュース7」では、スポーツニュースのコーナーに限ると体言止め・助詞の省略は6回確認できる。これに対し、同6日放送のラジオの「NHKきょうのニュース」のスポーツニュースコーナーでは、体言止め・助詞の省略は確認されなかった。

総じて、ラジオのニュースは、言語表現をできるだけ省かないようにするという傾向が見られる。これを示すものとして、次の例を挙げよう。以下は、テレビとラジオで天気予報に移る時のアナウンサーの発話を比較したものである。

(18) テレビの例

(画面下に「気象情報」の文字)「今日は東日本北日本で冷たい雨となりました。あすはどうでしょうか。気象情報、^{なからい}半井さんです。」

(19) ラジオの例

「次は全国の気象情報です。よこやまようこさんに伝えてもらいます。」

(19)のラジオの例では、気象予報士の名前の紹介の際、「伝えてもらいます」という表現が入っているが、(18)のテレビではそれが省略されている。(このように「〇〇さんに伝えてもらいます」と言う代わりに「〇〇さんです」とだけ言う表現がテレビでは最近非常に多い。)

ラジオは音声記号だけのメディアであるため、言語表現を省略すると情報が正しく伝わらなくなる可能性が高い。よってできるだけ言語表現を省かないようにする傾向があると考えられる。一方テレビのニュース番組では、音声言語表現を省略しても、代わりに映像によって情報が伝えられる可能性がある。このため、ラジオとは比較にならないくらいの頻度で省略が生じるのであろう⁸⁾。

上の例では、省略以外にも気づく相違がある。3節で述べた疑問の形の表現が、(18)のテレビでは現れている(「あすはどうでしょうか。」)のに対し、(19)のラジオではそのような表現は生じていない。

さらに、テレビとラジオの相違を示す他の例を挙げよう。以下は、株価の下落のニュースの中で、テレビ・ラジオニュース共にほぼ同じ場所での個人投資家へのインタビューが流れた場面である。

(20) テレビの例

(アナウンサー)「株価の下落が止まりません。週明けの東京株式市場は全面安の展開になり、東証株価指数TOPIXは4年10ヶ月ぶりに1000を割り込みました。アメリカで金融安定化法が成立したものの、アメリカ発の金融危機が、世界経済にさらに悪影響を及ぼすのではないかという警戒感が強まっています。」

(街頭でのインタビュー映像に切り替わる。「東京中央区」の文字が下方中央に一瞬出る。)
 (男性が携帯電話で)「最悪だ。早く売ってけりをつけたほうがいいよ。」
 (同じ男性がインタビュアーに向かって)「ちょっとびっくりですね。… (筆者による略)」
 (画面右上には、「個人投資家」の文字。)

(21) ラジオの例

(アナウンサー)「東京中央区にある証券会社の前で、個人投資家に聞きました。」
 (男性)「含み損、そうですね、200万くらいですかね。… (筆者による略)」

この例で気づくのは、インタビューに答えている個人投資家である男性の言葉である。テレビ、ラジオともインタビュアーに対して答える発話が流されているが、テレビではそれに加えて、男性が携帯電話で、「最悪だ。早く売ってけりをつけたほうがいいよ。」と述べている場面が流される。電話の相手が誰かは示されないが、少なくとも電話をかけていることだけは映像からわかるという状態である。もし同じ発話をラジオで流しても、映像がないので、どういう状況で誰に向かって話しているのか聴取者が理解するのは困難であろう。この発話が流されることには映像が不可欠であることがわかる。この発話を流す目的は、やはりニュースを娯楽的に脚色することであると考えられる。株価の下落に個人投資家が動揺しているという雰囲気を伝えるためであろう⁹⁾。

また、3節で述べた「報告者の匿名性」に関しても、テレビとラジオの間には相違がある。(17)で例を挙げた通り魔事件のニュースをテレビとラジオで比較してみよう。まず、「容疑者の携帯サイトの書き込み」に関しては、テレビでは書き込みの内容をほぼそのまま匿名の報告者が読み上げたのに対し、ラジオは書き込みの内容には触れず、容疑者が書き込みをしたということだけをアナウンサーが伝えている。容疑者の供述を伝える部分は、テレビとラジオでかなり重なっており、比較のためによい資料となるので、(22) (23)に挙げる。

(22) テレビ

(アナウンサー)「これまでの調べに対して、加藤容疑者は次のように供述しているということです。」
 (匿名の報告者)「携帯電話のサイトに書き込みをしたが無視され、現実の世界で大きな事件を起こせば見返してやれると思った。」
 (アナウンサー)「東京地検は、事前にナイフを用意するなど犯行が計画的な上、事件の経緯や動機に関する供述も具体的で、精神鑑定の結果からも刑事責任は問えると判断し、加藤容疑者の拘留期限の今月10日にも、殺人や殺人未遂などの罪で起訴するものとみられます。」

(23) ラジオ

(アナウンサー)「これまでの調べに対し、加藤容疑者は『携帯電話のサイトに書き込みをしたが無視され、現実の世界で大きな事件を起こせば見返してやれると思った。』などと供述しているということです。東京地検は、事

前にナイフを用意するなど犯行が計画的な上、事件の経緯や動機に関する供述も具体的で、精神鑑定の結果からも刑事責任は問えると判断し、加藤容疑者の拘留期限の今月10日にも、殺人や殺人未遂などの罪で起訴するものとみられます。」

(22) のアナウンサーの2番目の発話は、(23) のアナウンサーの発話の後半部分とまったく同じである。それ以外の部分も内容的には同じであるが、提示の仕方には大きな違いがある。(22) では、容疑者の供述部分になると、別の報告者(匿名)がアナウンサーと交代して供述を読み上げる。一方、(23) では、アナウンサーが一人で容疑者の供述を直接話法の形で伝えている。

このように、同じ内容のニュースでも、テレビとラジオのニュース番組では、多くの相違があることがわかる。近年のニュース番組での言語の変化は、テレビに特徴的なものである。これには、テレビのニュース番組が視覚的な記号を前提としていることが重要な役割を果たしている。また、ここでも、ニュースを娯楽的に脚色する傾向が様々な形で現れていることがわかる。

この節では、テレビとラジオのニュース番組を比較したが、同じテレビのニュース番組でも、番組によって相違が見られる。次節ではその点を取り上げる。

5. チャンネルの違いによるニュース番組の違い

この節では、同じ放送局(NHK)のテレビニュース番組の比較を行う。以下で比較するのは、4節で扱った「ニュース7」(午後7時から7時30分放送)と、「BSニュース」(午後7時から7時15分放送)で、共に2008年10月6日に放送されたものである。「ニュース7」はNHK総合、「BSニュース」はBS第一で放送されたものである。まず、ニュース番組の報告者が使った言語において、2節で述べた現象(体言止め・助詞の省略、動詞的要素の省略、要点の後置・省略)がどのくらい生じたかを比較した結果が表3である。

表3

	「ニュース7」(総合) (放送時間30分間)	「BSニュース」(BS) (放送時間15分間)
体言止め・助詞の省略	18	1
動詞的要素の省略	3	0
要点の後置・省略	2	0

表3が示すように、同じ放送局のテレビニュース番組であるにもかかわらず、「BSニュース」では、体言止め・助詞の省略、動詞的要素の省略、要点の後置・省略がほとんど見られない¹⁰⁾。

以下では、具体的な言語表現を挙げ、その他の言語表現上の違いを見よう。

(24) 「ニュース7」の例

(アナウンサー)「株価の下落が止まりません。週明けの東京株式市場は全面安の展開になり、東証株価指数TOPIXは4年10ヶ月ぶりに1000を割り込みました。アメリカで金融安定化法が成立したものの、アメリカ発の金融危機が、世界経済にさらに悪影響を及ぼすのではないかとという警戒感が強まっています。」

(25) 「BSニュース」の例

(アナウンサー)「週明けの今日の株式市場は、アメリカ発の金融危機が世界経済にさらに悪影響を及ぼすのではないかとという警戒感から全面安の展開になり、株価の下落に歯止めがかからず、東証株価指数TOPIXは4年10か月ぶりに1000を割り込みました。」

ほぼ同じ内容のニュースであるが、(24)の「ニュース7」では、「株価の下落が止まりません」という短い文からニュースが始まっている。その他にも、「警戒感が強まっています」という表現を使い、全体として危機的状況を強調するような構成になっている。これに対し、(25)の「BSニュース」は、「週明けの今日の株式市場は」から始まり、いわゆる5W1Hを伝えることに主眼を置いている印象を受ける。

これ以外にも相違点があり、例えば3節で述べたような疑問形の文が「ニュース7」では(24)の例の後に現れているが(「株価の下落に歯止めがかからないのはなぜなのでしょうか」)、「BSニュース」ではこのような表現はなかった。

このように、同じテレビのニュース番組でも、番組によって相違が見られることがわかる。言い換えると、ニュース番組における近年の急激な言語の変化は、番組によって生じているものと生じていないものがある。どれもテレビの番組であるから映像があるかどうかで違いはないので、ここでの相違は、娯楽的な脚色を行うかどうかの方針が番組によって異なることから生じているのではないかと考えられる。同じ放送局でもチャンネルごとに主に対象とする視聴者層が異なっており、それが番組中で使用される言語の違いとなって現れている可能性がある。

6. 結論

本論文では、映像メディアのうちいわゆるニュース番組で用いられている言語に近年生じている変化を示した。その変化には、体言止め・助詞の省略、動詞的要素の省略、要点の後置・省略や疑問形の文を用いること、匿名の報告者がナレーションを担当することなどがある。これらの変化は、ニュース番組を娯楽的に脚色する傾向と関係があるが、すでに特殊な文体的効果が薄れてしまうほど多用されて日常語化してしまっているものもある。「ニュース語」とでも呼べるような言語表現である。そして、ラジオのニュース番組との比較から明らかのように、この「ニュース語」は映像の存在と深く関わっている、あるいは、映像の存在を前提としていると言える。また、テレビ局が同じでチャンネルが異なる番組を比較した結果、同じように映像の存在を前提とした番組でも、使用される音声言語表現に相違があることが明らかとなった。

残された課題として、5節で述べた、ニュース番組が対象とする視聴者層の違いが、その番組に現れる言語表現にどのように影響しているのかという問題がある。この点を明らかにするためには、様々な放送局のニュース番組間の比較、また、同じ放送局で時間帯の異なるニュース番組間の比較が必要となる。この点については、別稿にて論じる予定である。

註

* 本論文は2007年度北陸大学特別研究助成を受けている。

- 1) 轟 (2007) で体言止めあるいは助詞の省略として扱ったのは、発話において間がおかれる直前が名詞で終わっているものである。発話に出てくるある表現が体言止めかあるいは助詞の省略なのかを区別するためには、それぞれを厳密に定義する必要があるが、轟 (2007) ではこれら二つを類似した現象として扱い、体言止めと助詞の省略を明確には区別していない。本論文でも区別しないことにする。なお、次の (i) のような文で、括弧中の動詞句が削除されて、間の前が表面上名詞で終わっている場合は、体言止め・助詞の省略とはみなさない。
 - (i) 太郎はりんご (を食べ)、次郎はみかんを食べた。
- 2) 例文中では、名詞の直後に間がある場合に、助詞が省略されているとみなせるところは読点、それ以外は句点を入れてあるが、註1で述べたように、この区別はここでは厳密なものではないので、議論の余地が残されている。
- 3) 放送時間帯の異なるニュース番組は主に対象としている視聴者層が異なる可能性が高いため、通時的な比較を行うときには放送時間帯が近い番組を比較することが望ましい。(2)で例を挙げた「ニュースウォッチ9」に関しては、2、3年以内に同時帯に放送された番組との比較はまだ行っていない。しかしながら、1974年の午後9時台に放送された「ニュースセンター9時」では、後の(3)で挙げた例のようなスポーツコーナーでの例以外では、体言止め・助詞の省略はほとんど出現しない。
- 4) この「ニュース番組の娯楽番組化」は、言語以外の面での変化にも表れている。例えば、映像面では、写真を徐々にアップしていくなど、特殊な効果を出すことを狙った、ドラマや映画的な手法がニュース番組でも頻繁に取り入れられている。また、プログラムの構成の面では、番組中で主なニュースの区切りごとに出演者同士が感想を述べ合うような場面が挿入される。
- 5) 字幕はアニメーション効果を伴って出たので、出始めから完全に読めるようになるまで時間の幅があった。(14)で示したのは、字幕がほぼ完全に読めるようになった時点である。
- 6) 特別大きな出来事のあった日にはニュース番組が特別編成になることが多いので、そのような日は避け、通常の番組枠でニュース番組が放送された日を選んだ。
- 7) このラジオ番組で体言止め・助詞の省略が現れたのは、次のような株と為替の値動きを伝える部分である。
 - (ii) a. 日経平均株価、今日の終値は先週末より465円5銭安い1万473円9銭、東証株価指数TOPIXは48.92下がって999.05でした。
 - b. そして海外市場ロンドン、円は現在1ドルが103円17銭から21銭での取引、またユーロは1ユーロが140円25銭から29銭での取引となっています。
- 8) 映像という視覚的な記号を使うことを前提として音声言語表現の省略を行うことは、映像を見られない人々への配慮という点から問題となる可能性がある。代表的な例としては障害者への配慮という問題があるが、それだけにとどまらない。現在は様々な機器の発達で、テレビニュースでも映像を見ず音声だけを聴くという場面が増えている。(例えば、車を運転しながら音声だけを聴くなど。)このような状況が特殊なものではなくなっている以上、重要な情報を伝達する役割を映像のみに担わせ、音声言語による情報伝達を省くという傾向には問題があると言える。
- 9) 人が携帯電話で話しているところを無断で撮影したとは考えにくいので、おそらくこの電話をしている場面は、前もって男性の許可を得て撮影されたものであろう。
- 10) 表3の「BSニュース」で体言止め・助詞の省略が現れたのは、次のような株価を伝える部分である。これは、同日のラジオ番組で体言止め・助詞の省略が現れた部分とほとんど同じである。註7を参照。
 - (iii) 日経平均株価、今日の終値は先週末よりも465円5銭安い1万473円9銭、東証株価指数TOPIXは48.92下がって999.05でした。

参考文献

- 影山太郎（1999）「形態論とレキシコン」西光義弘編『日英語対照による英語学概論』47-96，くろしお出版。
- 加来由子（2007）「午後のワイドショー消え行く東京」朝日新聞2007年9月19日23面。
- 村松賢一（2005）「ニュース番組における『おしゃべり』」三宅和子，岡本能里子，佐藤彰編『メディアとことば2』ひつじ書房。
- 根岸裕一（1999）『新聞記事翻訳の現場から 和英翻訳ハンドブック』大修館書店。
- 轟 里香（2007）「映像メディアで使用される言語の変化—英語学習者に対する影響—」『北陸大学紀要』第31号，125-135。